

の変種として区別するのが妥当であろう。変種としてリュウキュウフシグロとしたい。初島氏の琉球植物誌(1991)にはこの仲間は載っていないが、科学博物館に所蔵されている種子島の標本はリュウキュウフシグロである。したがってこの変種は九州南部から琉球南部まで分布することになる。ただ個体数が少なくあまり採集されることがないようにである。台湾で *Silene morii* Hayata として扱われているものはヒメケフシグロそのものと思う。九州では南と北で分布が断絶していることから、琉球のものは九州から南下したものでなく、台湾をとおして北上してきたものと思われる。

フシグロ *S. firma* Sieb. et Zucc. はアムール、ウスリー、満州、中国北部・中部、朝鮮、日本に分布し、ヒメケフシグロより分布が狭い。南の限界は九州南部であろう。ところが富山大学の難波恒雄氏の一行が、1968年の台湾で調査に際して採集してきた霧社の標本は、フシグロそのものであった。霧社にはヒメケフシグロもある。フシグロは台湾では今まで知られていなかったものであり、種類としては最南限である。

Silene aprica Turcz. ex Mey. in Ind. Peteröp. 1: 28 (1835).

Silene morii Hayata, Icon. Pl. Formos. 3: 35

(1913), syn. nov.

Silene mushaensis Hayata, l. c. 3: 35 (1913), syn. nov.

Dister. E. Siberia, Mongolia, Manchuria, Korea, W. Japan, N. to S. China and Taiwan.

var. *ryukyuensis* Yamazaki, var. nov.

Melandrium firmum (Sieb. et Zucc.) Rohrb. f. *pubescens* auct. non Makino: Hatusima, Fl. Ryukyus: 273 (1971).

Inflorescentia terminalis, in 1-3 gradibus multiflora. Capsula urceolata, 6-7mm longa, 5mm lata. Semina minora, ca. 0.5mm in diam.

Hab. Ryukyu: Iriomote Isl., Hoshitate. (H. Ito, May 18, 1936, Typus TI). Ryukyu: Iriomote Isl., in open grassy field on sandy beach (S. Hatusima, Jul. 9, 1955, no. 18498, TI). Kyushu: Kagoshima Pref., Tanegashima Isl., Okigahamada, seashore (Y. Hidaka, March 25, 1954, TNS).

Silene firma Sieb. et Zucc. in Abh. Phys.-Math. Acad. Muench. 4-2: 166 (1845).

Distr. Amur, Ussuri, Manchuria, Korea, Japan, N. to C. China and Taiwan (new to Taiwan).

Hab. Taiwan. Nantou Hsien, between Wushe 霧社 1000m and Chientsing 見晴 1800m (Namba et al., Aug. 23, 1968, no. 2437, TI).

(東京大学理学部附属植物園)

クワガタソウ属の新帰化植物コゴメイヌノフグリ (山崎 敬^a, 浅井康宏^b)

Takasi YAMAZAKI and Yasuhiro ASAI: *Veronica cymbalaria* Bodard Newly Naturalized in Japan

最近、ツタバイヌノフグリ(フラサバソウ)(*V. hederifolia* L.)に似た *Veronica cymbalaria* Bodard (1798) が、各所で見られるようになった。この植物は地中海沿岸地方を中心に、南ヨーロッパにかけて広く生育する1~2年草である。花や果実がないとツタバイヌノフグリと区別しにくい、花弁は純白で萼片よりも長いので見だし、花梗は葉よりも長い。萼片は卵形~楕円形で鈍頭、平開し果実を包まない。果実に白色の長い開出粗毛を密生するのは顕著な特徴である。なお全体的にツ

タバイヌノフグリに較べると小ぶりで、葉は横幅が広く、鋸歯が浅く、数も多めで、葉の基部は截形状とならない傾向をもつ(Figs. 1,2 left)。ちなみにツタバイヌノフグリの花弁は淡紫色、萼片よりも短めで、花梗は葉よりも短い。萼片は鋸形、尖頭で果実を包む。果実の表面は無毛、平滑である。なお葉の鋸歯はやや深く、基部が截形状を呈する(Figs. 1,2 right)。

この植物は1961年に小石川植物園で、ヨーロッパから種子交換により入手し栽培したものに

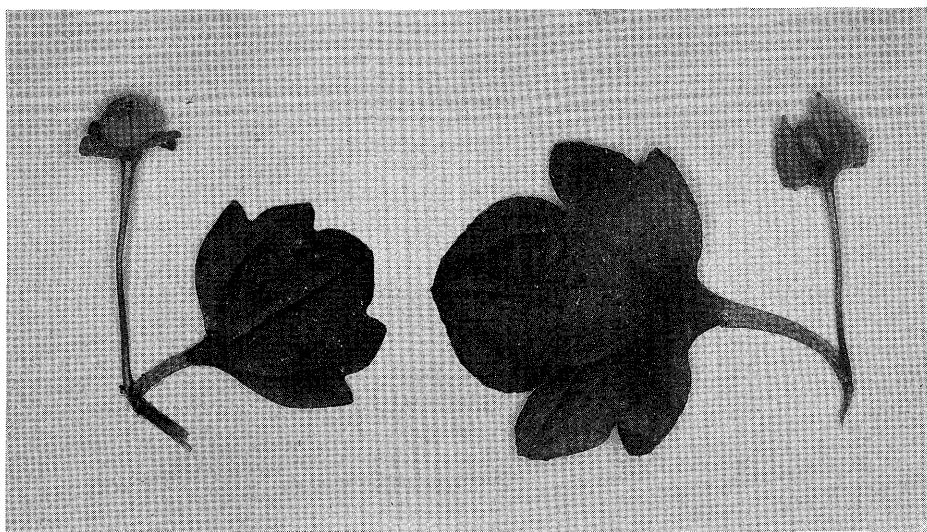


Fig. 1. Comparison of fruits and leaves of *Veronica cymbalaria* Bodard (left) and *V. hederifolia* L. (right).

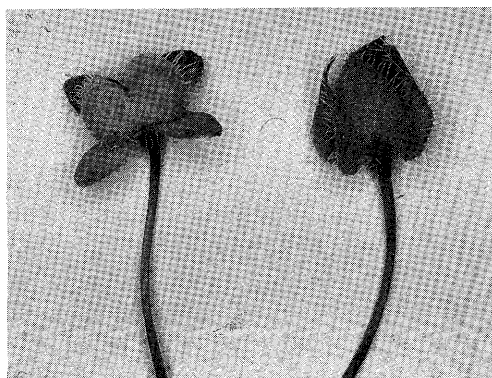


Fig. 2. Fruits of *Veronica cymbalaria* Bodard (left) and *V. hederifolia* L. (right).

由来する。その翌年にはこぼれた種子から殖え、1970年頃には可成り広がるようになった。筆者(山崎)の自宅(東京中野区)の庭にも、毎年のように繁茂している。最近では東大の本郷キャンパスの総合研究資料館付近にも群生していて、そ

のなかにツタバイヌノフグリも混ざっている。また筆者(浅井)は最近、東京都内の二子玉川でも採集した。

したがって本種の最初の侵入源は、学術研究用の資料に随伴して、国外から持ち込まれたものに由来するものである。このような例としては、先に浅井が報告(本誌 50 (10): 312~313, 1975)したアレチタバコをあげることが出来よう。恐らく既に各地に帰化し、ツタバイヌノフグリと誤認されている可能性がある。同学諸氏の再検をお願いしたい。

本種はツタバイヌノフグリよりも寒さに強く、秋に発芽した新苗は越冬し、春に旺盛に発育して群落をつくる。現状からすると本種は、我が国に広く定着帰化している同じくヨーロッパ原産のオオイヌノフグリやタチイヌノフグリなどと同様に、今後、一般的な帰化植物として君臨するものと思われる。なお和名は、可憐な小さい純白花を着けることからコゴメ(小米)イヌノフグリとしたい。

(^a 東京大学理学部附属植物園, ^b 東京歯科大学)